

## 「遅かれ早かれ」類の成立と定着について

北崎 勇帆

### 一 はじめに

本稿では、次の(一)のように、反義的な二語の形容詞が所謂補助活用<sup>1</sup>の命令形を取って「くかれくかれ」という形で連なり、「いずれにしても」に相当する意味を表す形式の史的展開について扱う。

- (一) a. 遅かれ早かれ、あの会社は倒産するだろう。  
b. よかれあしかれ、結果を待つしかない。  
c. あんな上司だが、多かれ少なかれ学ぶことはあった。

この表現は現代語において、この三種にパターンがほぼ限られており、慣用・固定化したものであると言える。ひとまずこの一群を「くかれくかれ」型と呼び、「遅かれ早かれ」「善かれ悪しかれ」「多かれ少なかれ」が代表する組み合わせを、それぞれ「早晚」「善悪」「多少」のタイプと呼称することにしよう。この形式は、用言命令形という文法的な形態が一定の環境下において固定的な用法を獲得したという点、また、その「反義的な形容詞の連続」という一定の構文を持ちながらも、使用される語が特定の数種に限定されるという点において、文法的な問題と語史的な問題の両方の側面を併せ持つ。

この「くかれくかれ」型の史的変遷を考える際に想起されるのは、現代語の「であれ」「にせよ」に残る、動

詞命令形によって逆接仮定条件を表す用法である。「くかれくかれ」型の一群が「であれ」相当形式に比して後発的なものであるならば、元々動詞のみが持っていた命令形の仮定用法が形容詞へと拡張した、と捉えることができるだろう。このような観点から、本稿では次の問題について考えたい。

・「くかれくかれ」型は歴史的に、どのような展開を遂げたか。また、「であれ」の系統の史的展開とはどのような関わりを持つか。すなわち、命令形による逆接仮定条件用法の体系の中で、どのように位置付けられるか。

・既に「であれ」系統の形式が存在する中で、なぜこのような型が新たに定着したか。すなわち、「くかれくかれ」型の成立・定着の要因として、どのような言語内的要請・背景事情が想定できるか。

本稿の構成を述べる。まず、次節において、辞書・先行研究における記述を引き、第三節において「くかれくかれ」型の用例を概観し、「であれ」の系譜についても北崎(二〇一六)を参照しつつ述べる。これらの調査に基づき、第四節では「くかれくかれ」型の成立要因を検討する。

## 二 辞書・先行研究における記述

当該形式の成立や史的展開に関する具体的な言及は管見の限りでは見られないが、近世語の共時態記述を行った湯澤(一九三六)、岩井(一九八一)に数例が挙げられている。湯澤(一九三六)は次の(二) a を挙げて「(筆者注、形容詞の命令形は) 仮定の意に用いることもある」(一一七頁)と述べ、岩井(一九八一)は(二) b の例を加えて「命令形の、「よかれあしかれ」「遅かれ速かれ」は、ともに命令形の重語であるが、副詞として扱ってよい形である」(一一〇頁)とする(以下、用例中の強調は筆者による)。

(二) a. 島が浄瑠璃、よかれあしかれ、おのれが冷えにも、熱気にもなることか。どうでもほかに様子があらう。  
(心中二枚絵草紙「一七〇六演」)

b. 女郎買をして金をつかふ者は、おそかれはや速かれ身体を減すから、(浮世床初編下「一八一三刊」)

その他、明治期以降について、近代評論文の放任表現に「多少」「善悪」「早晚」のタイプが見られることが中村(二〇〇六)に指摘されている。小学館『日本国語大辞典』第二版(以下『日国』)には「早晚」のタイプに「とかれおそかれ」「おそかれとかれ」「おそかれはやかれ」「はやかれおそかれ」が挙げられる中、初出例が最も早いのは「とかれおそかれ」である。「よかれあしかれ」「おおかれすくなかれ」の項と共に、簡略に引用する<sup>20</sup>。

○とかれ、おそかれ【疾遅】〔副〕早くも遅くも。いずれ。

\* 評判記・難波物語(一六五五)「かくのごとく、しゅじゅ様々のやきでにあへば、まこととおもひて、とかれをそかれ、あがりなまざとなる事、目のまへなり」

○よかれ、あしかれ【善悪】〔副〕よいにしろ悪いにしろ。よかろうと悪かろうと。善悪にかかわらず。どっちにしても。

\* 浄瑠璃・心中二枚絵草紙(一七〇六頃)上「よかれあしかれ、おのれが冷にも熱気にもなる事か」

\* 授業編(一七八三)九「族戚義故親友に限らずよかれあしかれ詩文の出来ぬと云はまれなり」

○おおかれ、すくなかれ「おほかれ…」【多少】〔連語〕分量、程度の差はあっても皆一様に。多くても少なくても。多少とも。いずれにしろ。

\* 都会の憂鬱（一九二三）〈佐藤春夫〉「すれ違ふ人々が多かれ少かれ皆注目をした」

\* 若き鷗外（一九四九）〈唐木順三〉二「多かれ少かれ空想、構想力に頼らねばならぬことはいふまでもない」以上より、「くかれくかれ」型の成立は近世頃であり、「多少」のタイプは「早晚」「善悪」に比して成立が遅かったと見てよいように思えるが、次項で述べるように、調査範囲内では中世に既に「よかれあしかれ」の例が見られる他、「であれ」の系統には中古以降に形容詞を用いる「よくもあれあしくもあれ」のような、「くかれくかれ」型と類似する例があり、これらをどのように位置づけるかが問題となる。以降、「くかれくかれ」型の用例を概観し、「であれ」の系統についても見ていく。

### 三 用例概観

#### 三・一 「くかれくかれ」型

この型がまとまって見られ始めるのは近世前期である。定着が早かったと考えられる、「早晚」「善悪」「多少」の順に例を概観する。

#### 三・一・一 「早晚」のタイプ

調査範囲において、『日国』の『難波物語』（一六五五刊）を遡る例は見つけ得なかった。「早晚」のタイプの例は近世まで見られず、近世前期においては（三）御伽草子や初期の近松浄瑠璃、並木宗輔の時代浄瑠璃に例がある他、特に、（四）西沢一風の作品に使用が多く見られる。いずれも「おそかれとかれ」の例であり、「はやかれ」の語形は見られない。

(三) a. あるとある上臆、似合ひ／＼の敵ありて、やる文の便り絶へず、物日の負ひやう長く伝はりて、

遅かれ疾かれ、通ひ来る男の、足の流れぬ「破産しない男」はあるまじ。(けしずみ「一六七七刊」)

b. おそかれとかれしする身の一かう只今打はたさんと。(今川了俊「一六八七演」)

c. 主を殺した者の子が、遅おそかれ疾とかれ遁れぬ命。(和田合戦女舞鶴「一七三六演」)

(四) a. おそかれとかれ此事あらはれ。よしなき骸をさらすにはきわまりぬ。(新色五卷書卷四「一六九八

刊」)

b. おそかれとかれそち達に近付にせねばならぬ。(御前義経記卷二「一七〇〇刊」)

c. おそかれとかれしぬるは世上の習ひ、(女大名丹前能卷四「一七〇〇頃刊か」)

d. おそかれとかれよめいりのくちはきわまつてあらふけれども、(乱脛三本鎗卷三「一七一八刊」)

e. 女房子迄ある中、かれらを見すて、そちを内へいれんなど、ふつ／＼かなはぬ事、にはかにおどろくにもあらず、おそかれとかれはなるゝ中、(色縮緬百人後家卷五「一七一八刊」)

近世後期の例を挙げる。「早晚」タイプは近世前期に引き続き用いられており、「はやかれ」の例はこの頃に見られるようになる<sup>30</sup>。

(五) a. それもさうかいおそかれ速かれかふいう身にならねば成ぬ (稲光田毎月「一七八四演」)

b. きづかひさつしやるな、役めはしがち、おそかれとかれ、滝つぼへぶちこんで築島成就しきへすれば、清盛公へ大忠臣。どふてくたばるあまめが命。(平家評判記「一七八九演」)

c. 遅おそれ速とかれあだし埜の、露となる身は如夢幻響、(逢州執着譚卷一「一八〇八刊」)

d. (人誰不死) 人たるものがたれか死せざる者あらんや、おそかれとかれ一度は死ぬものである、

(春秋左氏伝国字弁卷二八「一八一刊」)

e. 女郎買をして金をつかふ者は、おそかれ速はやかれ身体を減すから、

(浮世床初編下「一八一三刊」、二b再掲)

f. いつまでもくつつ付て居た処が、遅おそかれ早はやかれ切れなくつちやア、始末のつかねえ身のうへだから、この一件を幸ひと、いつちやアあんまり実がねえやうだが、(娘消息二編下「一八三四刊」)

g. 然ながら妙了尼も、遅おそかれ速はやかれ己が庵へ、帰らぬといふ事やはある。

(貞操園の朝顔卷六中「一八六二以前刊」)

### 三・一・二 「善悪」のタイプ

『日国』においては『心中二枚絵草紙』(一七〇六年初演)が早い例として挙げられるが、中世に既に、以下の二例を見出すことができる。ただし、これらの例は個人的・一回的な使用であったと考えられ、近世以降に「よかれあしかれ」としてそのまま継承されたものであるとは考えにくい。

(六) a. 又かくおほせてたびて候うれしさ、伊勢の御神御覧じ候らむ。ほいあるやうに覚え候。はじめたるやうにて、よかれあしかれ判のこと葉は書き候に、猶々嬉しく候。(西行贈定家卿文「一一八九頃成立」)

b. たゞまづ、よかれあしかれ、心の及ほどまなびて後の事なるべし。(落書露頭「一四一三頃成立」)

近世前期に十分な例があり、近世後期になると更に使用が広がる「早晚」のタイプとは異なり、近世におけ

る「善悪」のタイプの例は少ない。以下に見つけ得た全例を挙げる。

(七) a. 生きてうき世に有ならば、人をば、よかれあしかれ沙汰する習ひなり、名をだに申人もなし。

(唐糸草子「室町後期成立」)

b. 島が浄瑠璃、よかれあしかれ、おのれが冷えにも、熱気にもなることか、どうでもほかに様子があらう。

(心中二枚絵草紙「一七〇六演」、二a再掲)

c. 先よかれあしかれ一度返事をとらねばならぬと云て、枕くだいていやしやるほどに、頼もしうおもうて待給へ。

(宇津山小蝶物語卷三「一七〇八刊」)

d. 切ぬきの地紙には古骨を世に出し、張りぬきの似面はむだ骨とも聞えず、能かれあしかれ捨るものなく何<sup>ン</sup>でもかでも十九文と、何闇からぬお江戸の繁昌

(力婦伝「一七七六刊」)

一定数の使用例が見られるのは明治期に入ってからである。

(八) a. 親に不幸になる事を弁へぬではなけれども、善かれ悪しかれ女の身は男に附くが女の習ひ、わたしや一緒にいきますわいな。

(月宴升毬栗「一八七二演」)

b. 悪いお仲のお隣同士、善かれ悪しかれ家来の身は主人に附くが習ひゆゑ、仮令そちらの三平が、ぶたれませうが殺されませうが、構ふことはござりませぬが、

(太鼓音智勇三略「一八七三演」)

(九) a. …、と歌の調は好かれ悪かれ、西行急に読みかくれば、彼方は初めて人あるを知り、思ひがけぬに驚きしが、

(幸田露伴「一八六七生」『二日物語』「一八九二初出」)

b. 日本も近い頃までは、良かれ悪しかれ、風俗が一定して居つて日本らしいといふ処、即ち日本は日本の特色があつたのを、

(梶田半古「一八七〇生」『風俗改良』太陽一九〇一・四)

c. この「経済競争の」場合には善かれ悪しかれ、金さえ儲ければ勝利者と思う風がある。

(新渡戸稲造「一八六二生」『自警』「一九一二刊」)

### 三・一・三 「多少」のタイプ

「多少」のタイプは近世には見られず、明治期に入ってから例が現れる。「早晩」「善悪」のタイプに比して後発的なものであると考えられる。

(一〇) a. 神話というものには多かれ少かれこの「|| 想像の産物の」分子が含まれている。

(津田左右吉「一八七三生」『神代史の研究法』「一九一九初出」)

b. 「専門家となるということとは、」多かれ少かれ外界の要求の犠牲となることである。

(有島武郎「一八七八生」『惜みなく愛は奪ふ』「一九二〇初出」)

c. 今日の文壇に見うける作品は、多かれ、少なかれ、かやうな「|| 凡庸な」作品だと思ひます。

(平林初之輔「一八九二生」『大衆文学は天才文学である』太陽一九二五・九)

### 三・一・四 その他の例

以上に挙げた「早晩」「善悪」「多少」の他、明治期以降に次のような例が見られる。いずれも現代の辞書には立項されていないが、「くかれくかれ」という型が構文として認識されていたことを示す事例である。

(一一) a. 然れば則ち「現時ノ大統領」は亦実に他愛心を重むじて、厚かれ薄かれ、多少は之れを国と国との交際に適用せむとするの人物なりと云ふも、(天民生「生年不明」国民之友・三〇「一八八八刊」)

b. 浅かれ深かれ宗近君と孤堂先生との関係をぶすりと切って棄てたい。

(夏目漱石「一八六七生」『虞美人草』「一九〇七初出」)

c. かういふ例はたまさかにしかないにしても、いづれは、長かれ、短かれ、蟬といふ蟬が辿らなければならぬ生活の苦行であり、行路難であるのだ。(薄田泣菫「一八七七生」『独樂園』「一九三四刊」)

d. この二行ばかりの文章は、文飾のようにもとられようが、濃かれ薄かれ、そんな気持ちはたしかにあったのだ。  
(長谷川時雨「一八七九生」『(続)旧聞日本橋』「一九三五初出」)

e. 逃げ迷うて転んだ者も、浅かれ深かれ一太刀ずつは浴びせられているようです。

(中里介山「一八八五生」『大菩薩峠・小名路の巻』「一九二二初出」)

f. 何かまた周囲で煩わしいことが、大きかれ小さかれ、そのいづれかの翻蕩の中に生きています。なものですから、  
(中里介山「一八八五生」『大菩薩峠・畜生谷の巻』「一九三二初出」)

g. むしろ強かれ弱かれ「技術が」すでに存在するところの、現実の存在の「略」支配および制御の意志がそもそも学問的思惟の方法ならびに目的を規定するに与るということは、自然科学の歴史が我々に教えるところで、  
(三木清「一八九七生」『科学批判の課題』「一九二八初出」)

h. 自分の立場をよかれあしかれ、楽しかれ苦しかれ、客観的にそれを十分に理解して処して行くことの出来る人は、ざらにはないものですね。(宮本百合子「一八九九生」『獄中への手紙(一九四三年)』)

以上に見た「くかれくかれ」型の用例のうち、十分に例の現れる明治期以降のものを集計し、稿末の表一・

二に示す<sup>5)</sup>。

### 三・二 動詞命令形の逆接仮定条件用法

現代に「であれ」「にせよ・しろ」として残る、動詞命令形による逆接仮定用法は、中古において、体言に接続する場合に「にもあれ」（もしくははその縮約形の「にまれ」）や、接続詞的な「ともあれかくもあれ」等の形で現れるのが早い（中村一九九三・北崎二〇一六）。

(一二) a. 今日いかにまれ、このことを定めてむ。  
(大和物語一四七)

b. たけとり、答へていはく、「とまれかくまれ、まづ請じ入れたてまつらむ。  
(竹取物語)

c. 主君にてもあれ、父母、親類にてもあれ、知音、朋友にてもあれ、  
(十訓抄卷六)

d. なんでまれ、敵の方より出できたらんものをがすべきやうなし。  
(高野平家物語卷九)

e. あはれどくにもせよ、しぬるとも、師の出られなば、くふべしと（一休諸国物語卷三「寛文末頃

刊」)

この「もあれ」が形容詞に接続し、「形容詞連用形+もあれ」となる例も中古以降に散見する。いずれも、反義的な二語を用いるものである。

(一三) a. すべて、よくもあれあしくもあれ、おとこ、女にてぞあるべかりける。  
(うつほ物語蔵開上)

b. 但シ、多クモ有レ、少モ有レ、乞ハム物我等ニ送レ。  
(今昔物語集卷七)

c. うとうもあれしたしうもあれ、ゑこそ申有むまじけれ。  
(高野本平家物語卷二)

d. 水は深フカクもあれ、浅アサクもあれ、水の上へ「アサザが」一寸出るぞ。  
(毛詩抄卷一)

これらの例は本稿で問題とする「くかれくかれ」型と関連性を持つようにも見えるが、先に見た「善悪」「多少」のタイプに限られないことや、出現する時代に隔たりがあることから、「くくもあれくくもあれ」から「も」が脱落し、近世以降の「くかれくかれ」型を直接派生したとは考えられない。次節にて述べるように、逆接仮定条件表現そのものが、こうしたパターンを産出しやすい素地を持つものと見る。

#### 四 史的展開とその要因

##### 四・一 「くかれくかれ」型の展開

前節にて概観した「くかれくかれ」型の史的展開の経緯は、次のようになる。

- ・近世前期に「おそかれとかれ」を代表とする「早晩」タイプが発生する。
- ・「よかれあしかれ」は中世に例が見られるものの、当時既に「善悪」タイプが定着していたとは考えない。近世にも例は見られるが、定着は「早晩」タイプよりは遅く、一般的に用いられるのは明治期以降である。さらにそれから遅れて「多少」のタイプも使われるようになった。

・これら「早晩」「善悪」「多少」に限らない、「浅かれ深かれ」「長かれ短かれ」のような例が明治期にあり、「くかれくかれ」型の構造が、他の形容詞にも臨時的に適用されることがあったと見られる。

冒頭に挙げた諸問題について、まず、「くかれくかれ」型の成立事情を、命令形による逆接仮定条件表現と、逆接仮定条件による「任意性」の提示の二側面から述べる。

##### 四・二 成立要因と背景事情

「くかれくかれ」型成立の素地として、動詞命令形によって逆接仮定条件を提示する用法（三・二）が既に存在していたことが挙げられる。現代語において、この複合辞を構成する用言は「あり」「す（る）」に限定されるが、近世頃までは「あり」に限られない「も＋動詞命令形」という範列的な自由度を保っていた。

（一四） a. みこにもおはせよ、上らうにもあれ、おもてやはみえ給へる。（うつほ物語国譲中）

b. 思切テ、明日ノ活計ナクハ、飢死モセヨ、寒死モセヨ、今日一日道ヲ聞テ、仏意ニ随テ死ント思フ心ヲ、先ヅ可レ発也。（正法眼蔵随聞記卷三）

c. 但シ義ヲハイカニモ云へ。其宗ニ約スレハ。云ヒツムルトコロノアル也。（解脱門義聴集記卷一

〇）

d. いかにもなれ、何条ことかあらんと思へば、いのらぬなり。（宇治拾遺物語卷一四）

e. いくさは又おやも討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乗りこへ／＼戦ふ候。（高野本平家物語卷

五）

f. 敵にもおそはれよ、山越えの狩をもせよ、深山にまよひたらん時は、（高野本平家物語卷九）

形容詞（またその補助活用）によって示される様態は、既に広範に用いられていた「あり」によって示されるものと隣接するため、動詞命令形による逆接仮定が形容詞へと拡張される契機となった。このとき、中古以降に一定数見られる「くくもあれくくもあれ」のような「形容詞＋もあれ」の型が選択されなかったのは、近世当時に既に「であれ」の系統が一語化した「でもあれ」に一本化されていたために、形容詞を前接させることが困難になっていたからであろう。

但しこれらの事情は、「くかれくかれ」型が成立するための前提条件であって、積極的な採用要因ではなく、

また、形容詞命令形による逆接仮定条件の提示が「くかれくかれ」という構文に限定される理由の説明にはならない。例えば、明恵の『解脱門義聴集記』には、次のように、「(いかに)も+形容詞命令形」とする例が見られるものの、個人的な使用であり、定着には至らなかったようである。「くかれくかれ」型の定着の問題については、逆接仮定と形容詞の関係性から考えたい。

(一五) a. イカニモハヤカレ。ヲソクユクモノ、。ユク地ヲコソ。ハヤクモユケ云々。(解脱門義聴集記卷四)

b. 情有ノ相ハ。イカニモ広カレ有分限也。(解脱門義聴集記卷八)

逆接仮定条件を用いて「どのような場合でも前件が成立する」という「前件の任意性」を示す場合、次のパターンが考えられる(前田一九九三、原田・本多一九九七、富樫二〇〇五)。

① 単純な複数項の例示…太郎でも次郎でも三郎でも

② 意味的に対立する二語の並列

肯定・否定の二項の並列の場合…大きくても小さくなくても、大人でも大人でなくても

意味的に対立する二項による並列の場合…大きくても小さくても、大人でも子供でも

③ 不定語を含む表現の使用…何でも、どのような場合でも

このうち、形容詞補助活用の場合②の「意味的に対立する二項の並列」のみが「くかれくかれ」型として定着した。これは、形容詞によって前件の任意性を提示することと、反義的な二語の並列の親和性が高かったことが考えられる。すなわち、属性形容詞は一定のスケール上で、ある性質・状態の度合いを表すものであるから、「全ての場合」を表現する場合、必然的に、そのスケールの大小両端の極値によって集合全体を示すことになる。

例えば①のパターンについて、「であれ」による複数項の例示には、典型的には次のような例があるが、この表現に含まれる項目は「属する要素がある意味素性を共有する」（原田・本多一九九七：四二頁）必要がある。形容詞の場合、ある一定のスケールを持つ語には限りがあることから、複数項目を提示し、かつ、その項が反義的な関係に基づかないことを満たすのは難しい<sup>1)</sup>。

(一六) むしろは荒磯海の浦にうつるなる出雲むしろにまれ、生の松原のほとりに出で来なる筑紫むしろにまれ、みるをが浦に刈るなるみつふさむしろにまれ、そこにいる入江に刈るなるたなみむしろにまれ、七条のなはむしろにまれ、侍らむを貸させ給へ。  
(堤中納言物語・よしなしごと)

なお、「くかれくかれ」型が採用されたのは、「くくもくくも」「くきもくきも」「くきにつけくきにつけ」のように、反義的な二語による前件の任意性の提示が既に行われていたこと(事例として松本一九八六等)。や、反義関係の漢字二字から構成される語が、「いずれにしても」の意を持つ副詞用法を派生したと密接な関係があるだろう<sup>2)</sup>。すなわち、反義的な二語の並列によって「どのような場合でも」という前件の任意性を提示することが(他のパターンが排除されたことも相まって)近世以前から行われていた。その反義的な二語の並列という構造が、命令形による逆接仮定条件にも適用されたものとも捉えられるのである。

## 五 おわりに

本稿では、「くかれくかれ」型の史的展開について以下の点を示した。

- ・形容詞補助活用命令形による「くかれくかれ」型は、「早晚」「善悪」「多少」のタイプの順に定着した。
- ・命令形による逆接仮定用法があり、形容詞の性質と、反義的な二語の並列による任意性の提示との親和性の

高さが「くかれくかれ」型の採用を促した。  
 今回考察した「くかれくかれ」型や「であれ」の系統を含め、元来命令・希求を表していた命令形という形態が機能語化し、条件形式を派生する現象は通時的に見られる現象である。他の個別事例や、他形式からの条件形式への派生も併せて、総合的に検討していきたい。

表1 「～かれ～かれ」型の用例数

生年	1840 -45	-50	-55	-60	-65	-70	-75	-80	-85	-90	-95	-00
早晚	0/1	1/0	0/1	3/2	11/0	28/1	9/2	8/1	25/6	19/1	10/2	32/7
善悪				2	6	9	8	16	14	17	46	28
多少						3	1	5	14	20	30	52
他					1		2		3		2	
計	1	1	1	7	18	41	22	30	62	57	90	119

表2 「～かれ～かれ」型の著者数・話者数

生年	1840 -45	-50	-55	-60	-65	-70	-75	-80	-85	-90	-95	-00
早晚	0/1	1/0	1/0	2/2	7/0	7/1	8/2	6/1	15/5	10/1	9/2	18/6
善悪				2	3	5	6	3	10	5	13	16
多少						2	1	3	2	8	10	26
他					1		2		3		2	
計	1	1	1	6	11	15	19	13	33	24	36	66

<sup>1</sup> 例えば、グループ・ジャマシイ編（一九九八）では、【かれ】「Aーかれ Aーかれ」の項に「遅かれ早かれ」「多かれ少なかれ」の例が挙げられ、「どちらの場合であっても」の意味。対立的意味のイ形容詞が用いられる。（一）は「時間の早い遅いはあっても、いずれ」、（二）は「量・程度の多い少ないはあっても、いずれにしても」という意味（筆者注、一・二はそれぞれ「遅かれ早かれ」「多かれ少なかれ」）。慣用句的に使われ、他には「よかれあしかれ」がある」（九六頁）と説明される。

<sup>2</sup> その他の辞典としては、前田勇編『江戸語大辞典』（講談社）に「遅かれ早かれ」の立項があり、「天道さまが明らかになれば、おそかれ早かれ宗犬様は討たれ給はん」（女模様稲妻染「一八一六刊」）の例が挙げられる。

<sup>3</sup> 近世前期において専ら「とかれ」が用いられ、「はやし」がこの形式に採用されなかった要因として、「とし」が主に時間的な早さに、「はやし」が動作そのものの敏速さに重点があり（平安和文・鎌倉和漢混交文について、関一九八五）、近世にもその差異が引き継がれていたということが考えられる。

<sup>4</sup> 西行の書状には他に「入道殿の御判は、よかれあしかれ、御心にいれいらざれ申候にし御ことうけ候しかば」（御物本円位仮名消息：田村一九六一）の例もある。

<sup>5</sup> 国立国語研究所（二〇一七）『日本語歴史コーパス 明治・大正編「雑誌」（短単位データ 1.1, 中納言 2.2.2）、国立国語研究所編全文検索システム『ひまわり』用『青空文庫』パッケージ（20170401）、『国国会議録』パッケージ（20140327）を対象とした。いずれも全データを対象、短単位検索において「品詞（大分類）…形容詞」かつ「活用形（大分類）…命令形」にマッチするものをひとまず収集した上で、併せて文字列検索（「かれ」、「漢字+れ」等）を行い、誤解析によって漏れた例も収集した。表一・二は、著者・話者の生年を五の倍数で切り

捨て、一九〇〇年を下限として集計を行った。表一には集計した用例数をそのまま示したが、母体・使用者による偏り（例えば宮本百合子「一八九九年生」による「善悪」タイプの例が三四例、など）を考慮するため、同一著者・話者による複数回の使用を正味の人数として集計し、著者・話者数として表二に提示した。「早晚」タイプには「遅かれ早かれ」の語順を取るものと「早かれ遅かれ」の語順を取るものがあり、「遅・早」「早・遅」の順にスラッシュで区切って例数を示した。なお、表に示したように、明治期には語順を「早・遅」とするものが少なからず用いられるが、「善かれ悪しかれ」「多かれ少なかれ」に見られる「程度の甚だしい場合とそうでない場合」の並列との体系化を図るため、「遅かれ（「時間の長さ」の点で程度が甚だしい）早かれ（そうでない）」の語順に収束したのではないかと考えられる。

他、「悪しくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらむ」（土左日記）のような例がある。

③の場合、形容詞には「いかに〜」のような、様態を示す不定語のみが共起し得る。しかし、この表現は（一五）にも見られるように「どれだけその状態であつても」と、形容詞で示される様態の極限值が仮定されるのみで、一般的な「どのような場合でも」という任意性を示すには至らない。これが、文法形式として定着しなかった要因であろうか。また、②の肯否関係に基づくものは、「〜かれ〜くなかれ」という型が考えられるが、实例は見られない。唯一、「しゆきやうしやたうしん、あれなかれ、ころもをき、けさをかけて、まことにうへるを、かなしむこそあれ」（弁慶物語・慶應義塾図書館蔵古活字版）のように、「有り」と「無し」の反義関係による「あれなかれ」の例が見られ、これは、岩手県気仙郡に「あれながれ、おらそんなごど知らねあ」（小学館『日本方言大辞典』より菊地武人『気仙方言誌』の例）等として残るようである。近代以降においても、近世文学者の松田修が「〜であれなかれ」を多用することが指摘されており（中村二〇〇五）、命令形の逆接仮定

用法や「くかれくかれ」型からの類推によって生産され得る形式のようである。

。例えば、「善悪」(原一九九一・玉村二〇〇六)、「是非」(原一九九一・玉村一九九一)、「有無」(玉村二〇〇八)、「早晚」「多少」など。

〔引用資料〕

大和物語・今昔物語集・正法眼蔵随聞記・宇治拾遺物語・唐糸草子・新色五卷書・日本古典文学大系(岩波書店)／竹取物語・土左日記・十訓抄・けしずみ・心中二枚絵草紙・浮世床・新編日本古典文学全集(小学館)／うつほ物語・うつほ物語の総合研究(勉誠出版)／解脱門義聴集記・納富常天(一九六七)「明恵述・高信編「解脱門義聴集記」』『金沢文庫研究紀要』4／西行贈定家卿文・群書類従14<sup>3</sup>(JapanKnowledge所収本)／高野本平家物語・新日本古典文学大系(岩波書店)／落書露頭・歌論歌学集成(三弥井書店)／毛詩抄:『毛詩抄詩経』岩波書店／弁慶物語・室町時代物語大成12(角川書店)／一休諸国物語・嘶本大系(東京堂)／今川了俊・近松全集(岩波書店)／春秋左氏伝国字弁・漢籍国字解全書15(早稲田大学出版部)／月宴升毬栗・太鼓音智勇三略・黙阿弥全集(春陽堂) 用例調査の一部に、国文学研究資料館『大系本文データベース』、国立国語研究所(二〇一四)『日本語歴史コーパス 平安時代編』(短単位データ1.0・長単位データ1.0)、ネットアドバンス社 JapanKnowledge Lib を用いた。

また、これらの他、不足する近世期の用例を補うため、国立国会図書館デジタルコレクション、[archive.org](http://archive.org)に公開されている以下の叢書類に、簡易的なOCR処理を施したものを検索に利用した(年号は初回配本年)。

近世文芸叢書(明四三・国書刊行会)、徳川文芸類聚(大三・国書刊行会)、人情本刊行会叢書(大四・人情本刊行会)、江戸時代文芸資料(大五・国書刊行会)、歌舞伎脚本傑作集(大10・春陽堂)、世話狂言傑

作集・時代狂言傑作集（大一四・春陽堂）、近代日本文学大系（昭元・国民図書）、日本名著全集（昭元・日本名著全集刊行会）、日本戯曲全集（昭三・春陽堂）

但し、これら叢書類にはしばしば本文上の問題があるため、用例掲出の際はそれぞれ次に挙げる翻刻テキストや原本（もしくはその影印・画像など）に当たった。

女大名丹前能・叢書江戸文庫（国書刊行会）／御前義経記・乱脛三本鏡・色縮緬百人後家・力婦伝・逢州  
執着譚・貞操園の朝顔・早稲田大学蔵本（早稲田大学古典籍総合データベースに拠る）／稲光田毎月・東  
京大学国語研究室蔵本（大総本）／平家評判記・早稲田大学蔵資料影印叢書／娘消息・国会図書館蔵本（国  
立国会図書館デジタルコレクションに拠る）

「参考文献」

- 岩井良雄（一九七四）『日本語法史 江戸時代編』笠間書院
- 北崎勇帆（二〇一六）「複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の変遷」『日本語の研究』 12 | 4
- グループ・ジャマシイ（一九九八）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 関一雄（一九八五）「とく・早く・スミヤカニの意味―平安と院政鎌倉の用例について―」『山口大学文学会志』 35
- 玉村禎郎（一九九一）「是非」の語史―副詞用法の発生まで―『語文』 56
- ―――（二〇〇六）「善悪」の副詞用法の発生―近代語への歩み―『近代語研究』 13
- ―――（二〇〇八）「有無」の語史―副詞用法発生前史―『杏林大学外国語学部紀要』 20
- 田村悦子（一九六一）「西行の筆跡資料の検討」『美術研究』 214
- 富樫純一（二〇〇五）「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」その意味と諸用法をめぐって」『筑波日本語研究』

中村幸弘（一九九三）「放任表現考」小泉弘・林睦朗編『日本文学の伝統』三弥井書店

——（二〇〇五）「松田修の放任表現」『野州国文学』76

——（二〇〇六）「近代評論文の放任表現」『国学院大学紀要』44

原卓志（一九九一）「漢語「善悪」「是非」「決定」「必定」の副詞用法について」『鎌倉時代語研究』14

原田康也・本多久美子（一九九七）「日本語の全称量化表現——「も」の〈全称並列〉について——」『早稲田大学語学

教育研究所紀要』52

前田直子（一九九三）「逆接条件文「くても」をめぐる」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版

松本宙（一九八六）「中世における慣用句類型表現の変容」佐藤喜代治編『国語論究第一集 語彙の研究』明治書院

湯澤幸吉郎（一九三六）『徳川時代言語の研究 上方編』刀江書院

「付記」本稿は、科学研究費補助金（特別研究員奨励費 課題番号 16J00119）による成果の一部である。